

元ペトリのレンズ設計者、富田良三さんへのメールインタビュー

作者 : 2chペトリスレ リバースアダプタ

発行 : 2013.9.14

本文書の無断転載、引用を禁じます。引用には富田良三さん及びリバースアダプタの許可をとってください。

元ペトリのレンズ設計者、富田良三さんへのメールインタビュー

ペトリ元社員へのインタビューでお話していただきました半田善朗さんから紹介いただき、元ペトリのレンズ設計者、富田良三さんへお手紙をお送りしたところメールでお返事をいただきました。
2013年8月26日～9月3日にかけてメールでやり取りして、お聞きできた内容をリバーリアダプタの伝聞としてここにまとめます。

柳澤さんがペトリに入られた経緯について

栗林敏夫専務が富田さんに「戦後ヤナサンは屋台のおでん屋をやろうとしていたのを私がペトリへ引っ張り込んだんだ」と語られたそうです。

柳沢技術部長抜きではペトリを語ることは出来ないのは富田さんも同感とのこと。

敏夫専務も柳澤さんを評して、「アノ人は何をやっても成功する人だよペトリに来なかったらモットお金持ちになったに違いない」とも語られていたそう。

敏夫さんは彼の自慢の愛車を富田さんに貸してくれ、毎日5時になると富田さんはアメ車に乗って新宿、世田谷方面に向かい成果を上げたそうです。

栗林敏夫氏について

敏夫専務は前回のインタビューにあるようにバカ殿様(原文ママ)のようだったのはそのように思われるそうですが、立教や慶応、青学の英語のできる学生を入社させ、外国部を作って海外でカメラを売りまくる、町工場では出来ない大きな仕事をしたのは敏夫氏の功績とのことでした。

業界のリーダー的存在(前回のインタビューからキヤノンと思われます)の某社がペトリカメラ技術者大量引き抜きを行ったせいで、柳沢技術部は被害甚大だったそうですが、それにもかかわらず反撃に出る動きが見られ無かったので、栗林敏夫専務に反撃作戦を提案したら彼は喜んでくれたそうです。きっと悔しさを抑えていたに違いない。とのこと。

富田さんがペトリに入社されたのは、54年。ペトリに入社したのは、学業成績が優秀ではなかった(とは言われていますが、前回のインタビューでは早稲田出身とうかがっています)のと、銘柄にこだわりがなかったからとのこと。

ペトリのレンズ設計

当時レンズ設計は難しい仕事と思われていて、日本全体でも設計者の数は少なかったようだとのこと。

引退された光学の大家に手ほどきを受け、設計のスタートは1眼レフカメラの標準レンズだそうです。6枚構成ガウスタイプで、光学ガラスの用い方は定石を外れて1番レンズから6番レンズまですべてSF硝材を用われたそう。

狙いは像面のフラットネスとガラスで短波長をカットしてスッキリ効果を狙ったそう。上司のいる会社だったら不採用設計になっていたかもしれないとのこと。

何ミリ(50mm or 55mm)か聞きましたが、当時の記憶はあまりないそうなのと、資料もとっていないということでよくわかりませんでした。

できあがった試作レンズは柳澤部長がチェックされていたそうです。

“一流を目指したペトリのレンズ設計”(このフレーズも原文のままです。)

富田さんが設計したレンズを調べて、ペンタックスから誘いがきてありがたかったそうです。設計の旨く行った時はレンズの容姿が美しくなる。1度非常に型の良い望遠レンズを設計したことがあったそうですが、やはり画像は美しく柳さんが長時間見入っていたとのこと。どの望遠レンズなのか聞きましたが、こちらも残念ながらわかりませんでした。

ペトリのレンズ設計者は、富田さんの他

ズームの島田と呼ばれた島田邦夫さん

技術顧問新井敏行理学博士

理科大卒社員（林蔵さん）

がいらっしゃったそう。

島田邦夫さんはキヤノンの松居吉哉氏を深く尊敬し三次、五次収差論を用いた光学設計を得意とされて活躍されたそうです。現在はご病気で療養中とのこと。

技術顧問の新井先生は後に筑波大教授になられたそうです。-----当時彼の論文は学会で高い評価を得ていたとのこと。

現在もお元気で、富田さんと一緒に海外で働いておられるようです。

林蔵さんは、後年アメリカに留学され、帰国後日本で一番の高倍率ズームレンズを設計されたとのこと。今回の件で紹介いただいた半田様にお礼のメールと、お聞きした内容をお送りしましたら、お返事があり、フルネームは渡辺林蔵さんとおっしゃることを教えていただきました。

ペトリでは光学設計は手がけていらっしゃらなかったようですが、帰国後キノ精密で 28-200mm を設計されたようです。(80 年代半ばです。当時の最高倍率ズームなのは確かです。

高倍率ズームの開発に積極的だったタムロンでもこの倍率のズームを発売するのは 90 年代に入ってからになります。)

渡辺林蔵さんは、残念ながらすでにお亡くなりになっているそうです。

お金に細かい栗林さんがやる気を見せ、1000 万で三菱電機のマルコム計算機を買ってくれたのに残念だったそうです。富田さんは直後に退職されたからかもしれません。

またそれに関して、栗林家は相当な資産家にしては、富田さんの入社当時初めて味の素をキュウリにかけて食べたのを知っており、暮らしは質素で信州の出に違いないと思ったそうです。

現在、富田さんはフィリピンはセブ島でニシコで開発した研磨機を使いコヒーレントレンズを磨いているそうです。1Rから平面まで磨けて研磨された面粗さは4オングストリウムとのこと。

開発にあたって資料等はいっさい見なかったそうです。「今時の人はスグ検索を始めますがアレは発明にはよくありません。」とのことで、前回のインタビューで聞いたペトリカラー35 の話に通じるように思いました。これがペトリスピリットなのかもしれません。

資料等は残さないということで、いろいろ細かい話も聞いてみたのですが、昔のことで忘れてしまったと言われてしまいました。

東京光学のレンズ設計者富田良次さんとのご関係をお聞きしたところ、富田良次さんをご親類ではないそうですが、面識はあったそうです。光学技術辞典の著者で当時株式会社ザイカに在籍されていた小柳修爾さんを訪ねた時に紹介されたそう。
その場で話し合い、良次さんが兄貴分、良三が弟分ということになったそうです。

以上がお聞きした内容になります。

富田さんへの依頼の手紙に前回のインタビューの内容を同封していましたので、当時の人や、昔のこと、千住、梅田の当りの様子を思い出すことが多くなり懐かしい気持ちになったとのことで、多少ですが喜んでいただけたようです。

富田さん、貴重なお話を聞かせていただき、まことにありがとうございました。

文責:リバーサアダプタ